

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 30号



横浜教区主教 イグナシオ入江 修

「一粒の麦」

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。
だが、死ねば、多くの実を結ぶ」 (ヨハネ 12章 24節)

主イエスさまはエルサレムに入城され、受難が間近に迫った時、弟子のアンデレとフィリポにこのように告げておられます。

「地に落ちて死ぬ」とは、自らをささげること、進んで捨てること、自らを差し出すことを表していますが、そこには大きな実りが神さまによって与えられることを示しています。そしてその実りとは、命を指しています。一粒の麦が死ぬことによって、そこに新しい命がたくさん実るのです。

ところが人間は、逆に自らを生かそうと強く執着し、自分の命を生かそうとして自分の富や持ち物を増やそうとして来ました。そして、そのことに熱心になればなるほど、自分以外の人に犠牲を求めて来たのです。

お互いにそのようにする時、争いが生まれ、却ってますます自分を生かそうとする思いは強くなってゆくのです。ある意味、それは人類の過去の歴史と言えるかも知れません。

イエスさまが十字架にお掛かりになってから 2000 年を過ぎた現代においても、私自身を含めてすべての人がそのような思いにずっと囚われ続けているのです。

「一粒の麦が地に落ちて死んだ時、そこに豊かな実りが神さまによって与えられる、豊かな命が生まれる」と主は言われます。

感謝箱献金は、多くの人々の小さな一粒の麦が地に落ちて死んだことによる豊かな実りではないでしょうか。それは小さな一粒に過ぎないのかも知れませんが、その実りは集められて、神さまの御手により命を生かす豊かな実りとされて参ります。

感謝箱献金の意味は、日々の小さな感謝を共に献げていくという意味だと思うのですが、私は、献げることによって実は献げた者が本当に豊かにされるという意味をそこに感じます。自らを差し出すことで、実は献げる者自身が神さまによって豊かにされているのです。そしてこのことは、他のさまざまな献金でも当てはまるのではないのでしょうか。そこに、主の十字架の犠牲の尊さと共に、主を通して現わされた神さまの愛の豊かさと奥深さがあるのだと思います。

お献げ先からのおたより

サイディアフラハ「こちらの近況、子どもの様子」

代表・荒川勝巳

新年のこちらは乾季に入っていて埃っぽく、プロジェクト敷地の草木も緑色があせてきています。

女の子だけを扱っているサイディアフラハ児童養護施設はこの年末年始にかけて、施設を出ていく子もあれば新しく入ってくる子もいます。それで現在、15名の子どもたちを預かっています。

出ていくといっても、エリザベス（18歳）のように裁縫教室で2年間技術を身につけ卒業して施設を出る子もいれば、マリア（15歳）のように小学校を卒業し、寄宿舎高校へ入るために出ていく（マリアは夏休みなど長期休暇にもどってきます）など、子どもによって違います。

入ってくる子どもは時期的にはそれほど関係なく、必要な時に受け入れています。今回入ってきたイボンヌ（5歳）とミシェール（9歳）の2名はそれぞれ別なところからやってきました。しかし



今回は二人とも、いままで預けられていた親せきやキリスト教会のところでクリスマスを迎えさせた後にこちらへ来てもらったので、新年からになりました。

イボンヌがサイディアフラハに来た経緯は両親が離婚し、この両親が属する民族は伝統的に子どもの親権が父親になるということで、父親が彼女を引き取りました。しかしその父親が病気で死亡し、母親が離婚後に別の男

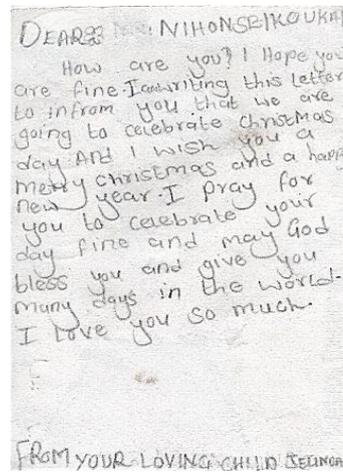


性と結婚したということもあり、イボンヌは父方の老夫婦に引き取られました。この老夫婦は貧しく自分たちの生活だけで精いっぱいなので、サイディアフラハで預かることにしました。イボンヌの性格は非常に人懐こく、私のような外国人でも自分から話しかけてきます。ミシェールのほうは両親が二人とも病気で亡くなり、おじさんがミシェールを預かることになりました。しかし、そのおじさんは貧しいだけでなく育ち盛りの子どもが数名いるので、いつも通っているキリスト教会へ彼女を臨時に預けました。その教会は長期的に預けられるわけではないので、サイディアフラハで預かることにしました。ミシェールの性格はイボンヌと反対で、私と目を合わせることもないです。今後変わっていくことを期待しています。

私どもの施設には他にも両親がいなく、しかも不治の病にかかっている子ども、両親がいても伝統的な売買婚を嫌って親元を逃げ出した子どもなども入っています。

皆さまからいただいているご寄付はこれらの子どもたちのために大切に使用させていただいています。それで皆さまにはいつも感謝しています。





サイディアフラハの子どもから
クリスマスカードが届きました

「釜石よりご報告」

エリフ 海老原祐治

今年も感謝箱献金よりご支援を受けることになりました釜石支援センター望です。ありがとうございます。

今年の3月11日で東日本大震災から8年という歳月を数えます。復興住宅の整備も約1200世帯分の約90%が終わり、仮設住宅は最大で3000世帯が入居していましたが、現在は300世帯を切るところまで減っています。各仮設団地はほとんどが空き家で、ぽつぽつと入居者がいる状況です。ただまだ一部の盛り土作業と宅地造成は整備中で、工事の終了待ちの方が仮設でお暮らしになっています。その他にも港湾の護岸工事などはまだまだ進行中です。

仮設住宅から復興住宅に被災者が移動するのに伴い、望の活動場所も変わりました。現在では活動のほとんどが復興住宅と地域の公民館などになっています。新たにできた復興住宅や住民の戻った被災地域でのコミュニティ作りが私たちの仕事です。復興住宅や地域で人の集まる機会を作り、絆を深めていき、自治会設立や自主活動の開催を促しています。しっかりとしたコミュニティを作り、住民同士の共助を豊かにすることが目的となっています。そしてそのような活動を通じて被災者と寄り添っていくのが望の仕事です。

被災者支援というものはいつか終わりを迎えなくてはなりません。しかし被災者に寄り添い続けることは必要です。私たちは5年前に望を設立したときから地域支援団体と名乗っています。被災者支援ではなく、地域支援ですと言っています。地域コミュニティ作りの専門職として、もっともニーズの高い仮設住宅や復興住宅や被災地域で仕事をする形で被災者に寄り添っています。

超高齢化社会に突入する日本では新たなコミュニティ作りが課題となっています。地域で支え合い、孤立化する世帯を少なくすることが求められています。私たちの経験がこのような課題解決に生かされることを願っています。そして教会が地域コミュニティの一つの核になることも可能だと考えています。



入管被收容者面会支援活動の現場から

＜難キ連＞ 難民移住労働者問題キリスト教連絡会

事務局長 佐藤直子

1月○日夜8時半、2年半の收容を解かれたばかりのTさんと姉の相談対応を終えての帰途、事務局携帯に牛久收容所被收容者からの電話。たどたどしい日本語で「メンカイキテクダサイ」と收容4年のソマリア出身男性、M.A.さんです。

茨城県牛久市にある「東日本入国管理センター」（牛久收容所）の被收容者面会支援活動を始めて19年目を迎え、連日、被收容者から面会要請電話を受け、難民相談日には仮放免後の当事者、支援者の相談を受けます。日本社会で在留許可（ビザ）のない難民を含む外国籍家庭の状況は、この19年間、收容処遇改善は遅々として進まず、強制送還に怯える無期限收容も長期化傾向にあり、收容を解かれる仮放免許可が出ても就労不可、国保加入不可、移動制限、定期的入管出頭義務など、ビザのない「見えない鎖で繋がれている」生活もほとんど変わりません。

2001年同時多発テロ以後の難民の收容急増に伴い面会支援を始め、また、仮放免難民の生活、医療、子女の教育など相談に応じてきました。入管内外で様々な問題に直面し苦しむ人々の救済を模索する中で、入管、行政への申し入れ、「難民が言葉による不利益を被らないよう」難民日本語教室開講、第3国再定住支援等も行う一方、異国日本で難民と認められず、帰る場所もなく在留許可も与えられない長期仮放免者の加齢と疾病、失望の日々は決して生易しいものでなく、支援者も心萎えることが屡々です。



仮放免許可で2年5か月の收容を解かれたTさんと姉のEさん

横浜教区柏聖アンデレ教会の壁に掲げられた2018年年句「わたしはけしてあなたから離れず、けしてあなたを置き去りにはしない」（ヘブライ人への手紙13:5）にどれほど慰めをいただいたかわかりません。再び立ち上がる力をいただき、2019年度の入管法改定で多くの外国人労働者を受け入れる前に、今、非正規滞在に置かれた人々が決して置き去りにされないようにと祈りながら、また難キ連の扉を叩く人に向き合うのです。

1月18日の相談日、2009年に面会支援、仮放免支援をしたコソボ難民Fさんと支援者Oさんが訪問。10年ぶり再会のFさんは心身共に病んでおり、支援に悩むOさんからの相談でした。PTSDなど心を病む長期仮放免者を支える事に身近な支援者が戸惑い、疲弊しきってしまうことは珍しくありません。時間通りに現れたFさんは10年以上の仮放免生活の中ですっかり人間不信に陥っている様子が窺え、デボラ宣教師と4時間に渡り聞き取りを致しました。医療費負担軽減から支援を探る方向性を打ち出したことにOさんが「相談できて安心しました」と涙を流されました。支援者の方への支援も使命と覚えます。

入管面会を「命を削るような」と評した大学生がいましたが難キ連面会支援活動に関心を寄せられ始められた聖公会横浜教区社会委員会、婦人会の皆さんの面会支援ご協働が10年を超えました。定期的面会支援ご協働により力強くお支え頂くと共に、毎年の日聖婦感謝箱献金ご助成のお支えに筆舌に尽くしがたい心からの感謝を覚えます。地を這うような働きへ関心の広がりにもさしくこの聖句を覚えます。2019年度の入管法改定で外国人労働者大量受け入れ前に、日本の社会保障から疎外されている仮放免難民がけして置き去りにされないように、正規滞在化に向け働きたいと切に願っております。

行ってきました

面会支援ボランティア

昨年10月10日、横浜教区社会委員会主催の「面会支援ボランティア」に初めて参加いたしました。柏聖アンデレ教会に10時半に集合し、難キ連の佐藤直子さんから、本日の面会予定者についての状況をお聞きしました。その後、参加者は4グループに分けられました。参加者は、社会委員、教区婦人会、感謝箱献金運営委員、難キ連のメンバーでした。牛久收容所（正式名称：東日本入国管理センター）に着くと、すぐ、その食堂で昼食をとり、午後1時になるとすぐ、順番の番号札を取ります。呼ばれると、面会希望者の名前と面会者全員の名前を書き、身分証明を示し、差し入れ物品を提出します。差し入れ可能な物は、事務所の壁面に貼ってあります。この日持参したのは、レトルトカレー、コーヒー、スティックシュガー、フルーチェ、ポディソーブでした。暫く待って、番号を呼ばれると、ロッカーに手荷物を入れ、面会室に行きます。3人まで入れます。刑務所と同じようなアクリルボード越しに、お話ししました。私が最初



にお会いしたのは、ベトナムの50歳の男性でした。祖国にいる娘さんに早く会いたい、と言っておられました。30分で終わると、また、同じ手続きをして2回目の面接の番を待ちます。二人目の方はインドのシーク教徒の方で、日本にいる家族のことを心配しておられました。お二人とも、既に2年收容生活を送っておられます。一日も早い仮放免が望まれます。二人の面会が終わると、もう4時を過ぎていました。帰りは車の方に北柏駅まで送っていただき、電車で帰路に着きました。感謝箱献金のお献げ先の一つである「難キ連(難民・移住労働者問題キリスト教連絡会)」のお働きに直接触れることのできた一日でした。

感謝箱献金運営事務局 金子みどり

女性の司祭按手 20年の感謝礼拝



2018年12月1日、東京教区聖アンデレ主教座聖堂に於いて、国の内外より主教様をはじめ多くの聖職者、信徒、他教派の方々も含め約200名が集い行われました。

九州教区女性の会



閉会／感謝礼拝が2月2日(被献日)に九州教区主教座聖堂で行われました

横浜教区婦人会総会 2019年1月23日



休憩時間、総会終了後にミニバザーでお献げ先のサイディア・フラハ、リグリマ・ジャパン、アルディ・ナ・ウペポの品々を販売致しました

サイディア・フラハ報告会 2018年11月10日

横浜教区市川聖マリヤ教会

一時帰国されていた荒川氏が、現地の様子等をスライドを使いお話してくださいました。

- ・ 報告終了後には荒川氏がケニアで仕入れてきた色鮮やかな民芸品やアクセサリ、布物を販売しまし



教区婦人会からの声

横浜教区婦人会 会長 エステル 須賀道子

婦人会の歩みはマキム主教夫人を会長に、北東京地方部夫人伝道補助会が結成されてから百二十余年の歴史があります。

日本聖公会婦人補助会特禱が昭和二年に制定され、横浜教区婦人会会則は昭和三九年に作られました。

横浜教区は山梨、静岡、千葉、神奈川4県に32教会、2集会所があり、役員会は輪番制でその働きを継続してまいりました。

婦人会・女性の会に集う人々が豊かな教会生活を送り、お互いの理解と親睦を深めるために、私たち役員会はオルターギルド研修会と教区婦人会大会を大きな柱として活動しております。

昨年のオルターギルド研修会は「礼拝について」のお話を伺った後、オルターギルドの製作奉仕をして、いろいろの方々からチャージブル、ストールなどの作品を見せて頂き、刺繍の美しさと手作業の細やかさに感動と感謝の気持ちでした。

感謝箱献金との関わりは難民・移住労働者問題キリスト教連絡会(難キ連)面会支援ボランティアに参加して東京入国管理局と東日本入国管理センターに行きました。また、

サイディア・フラハの報告会にも出席いたしました。

日本聖公会婦人会第25(定期)総会後第2回会長会では感謝箱献金のお献げ先に関する件で「難民・移住労働者問題キリスト教連絡会」の働きのため15万円をお献げする議案を提出し承認されましたことを報告いたします。

感謝箱献金事務局 チャプレンから

司祭 エレミヤ・パウロ木村直樹（大宮聖愛教会）

「イエスさまが、洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたとき、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿で降り、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえたとあります(ルカ 3:22)。わたしにとって、この御言葉はとても大切なものです。天からの第一声は「あなたはわたしの愛する子」でした。洗礼を受けるとは、この天の声が、わたしをも包んでくださるということです。わたしは決して神さまの御心に適う者ではありませんが、しかしそうではあっても、まず神によって愛されているところから、すべてが始まっていることが重要なのだと思います。放蕩息子の譬え(ルカ 15:11-32)は、わたしたちに、御心に適う者でなくとも、父である神はわたしたちを愛してくださっているということを教えています。こんなわたしをも愛してくださる神への感謝の思いが、感謝箱献金の礎なのだと思います。

感謝箱献金のいのり

神さま、今日もみ恵みの中で生かされていることを感謝いたします。
イエスさまはいつも、悲しんでいる人、苦しんでいる人と共に歩まれました。
私たちにもそのイエスさまの歩みに倣（なら）う心をお与えください。
私たちのこの献げものが、最も助けを必要としている人々のために用いられますように。
また、この人々との交わりを通して共に生きるものとならせてください。
主イエス・キリストのみ名によって アーメン



できることから始めましょう

支援先のことを学んだり、考えたり、ご一緒に小さな支援活動を展開しま

★ 支援商品の委託販売

- 支援商品の販売で活動資金を増やす努力をしている団体の、紅茶 や 手工芸品(ブックカバー・巾着・バッグ・布製小物) アクセサリー等を、婦人会の会合や所属教会のバザーなどで委託販売し、収益向上と活動へのご理解を頂くためにご協力ください。

★ 積極的にお話を伺う

- 献金先の代表(コーディネーター)の方に、各地の婦人会に出向いていただき、現地での活動のお話や、支援の先につながっている方々のご様子など、詳しく教えていただくことも可能です。

ご協力、訪問のご希望、その他のご質問詳細につきましては 感謝箱献金事務局 まで

☎ 0475-24-6915

E-mail: kansyabako@gmail.com

最初に、毎年、書籍購入にあたり日本聖公会婦人会から被献日献金を通して援助下さることを心より感謝申し上げます。私は聖公会出版で3年間、お世話になりましたが、その際、婦人会のみなさまが被献日献金活用として神学生が申請する書籍を聖公会出版へ一括注文下さった際も大きな感謝を覚えました。

なぜならば、初版300部が5年で売り切れれば良い方と言われるキリスト教出版業界におきまして、大口の注文依頼が来るのは聖公会手帳、ペロニカカレンダーを除き数えるほどしかないからでした。

さて、2018年度の感謝箱献金の奉献先を見てみますと、国内外の災害、紛争、貧困、差別によって苦しんでいる方々のために用いられています。シリアの難民キャンプ、バングラディッシュの少数民族ガロの女性たちの地位向上のため、日本における難民支援など、日本に暮らす人々にとっては意識が向かいにくい課題に対して用いられていると言えます。これは、感謝箱献金とその用いられ方を決める婦人会のみなさまの働きが、人の思いを越えて神さまの御心として行われているしるしであろうと実感しています。

これからも感謝箱献金と婦人会のみなさまの働きによって、社会の周縁で苦しんでいる方々が少しでも希望の光を見出すことができますようにお祈り致します。



プロフィール

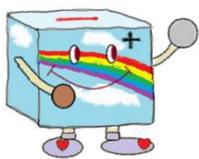
出身：神奈川県横浜市

出身教会：三光教会

経歴：イタリアンレストランで調理師として働いた後、聖公会出版で書店営業、

その後、学生寮厨房調理師を経て、2017年、聖公会神学院入学。

趣味：読書、ギターを弾くこと。



もうすぐ春ですよ～



編集後記

「ガリラヤのほitori」31号をお届けいたします。原稿を執筆頂きました皆さまには感謝申し上げます。今号ではサイディア・フラハ(ケニア)、難キ連、釜石支援センター望(東日本大震災支援・積立)からご報告を頂きました。皆さまからお献げ頂いた感謝箱献金がお献げ先でお役に立てている事を嬉しく思います。これからも、お献げ先との顔の見える関係を大切にしていきたいと思っております。

永井眞由美

日本聖公会婦人会感謝箱献金事務局
〒297-0032

千葉県茂原市東茂原 10-192

永井方

電話/FAX 0475-24-6915

E-mail kansyabako@gmail.com